入選

笑顔のバトンが繋がりますように

千葉県　三山中学校
２年　島田侑芽

「お手伝いしますか？」

私と和（かず）さんの出逢いは、この一言から始まった。夏休み前の猛暑日に単語ノートを買うため、家から少し離れた文具店へ行った帰り道に、両肩に荷物を掛け松葉杖で歩く 70 代ぐらいの女性が目に入った。不安定で転びそうな姿に私は驚き、「お手伝いしますか？荷物をお持ちしますよ。」と、思わず駆け寄り声を掛けた。

「ゆっくり帰るから大丈夫、ありがとう。」「私は時間もあるので大丈夫です。」と会話を交わし、2 人で顔を合わせ笑った。「それでは、お言葉に甘えて。」と、私に持っていた荷物を預けてくれた。額に広がる汗を見て、結構な間、誰にも声を掛けられずにがんばっていたと思うと、少し悲しい気持ちになったのを覚えている。

女性は荷物が手から離れ、少し身軽になったようだが、慣れない松葉杖に体が左右に揺れていた。私はこれまで松葉杖を使った経験がなく、どのようにアドバイスをして良いかもわからずに、歩くのをただ横で見守ることしかできず、一歩一歩がとても長く感じた。

やっと１つ目の信号まで、辿り着いたときだった。１人の女子高校生が、「大丈夫？大変そう。」と声を掛けてきてくれた。私と女性の姿がぎこちなく、危なっかしく見えたのだろう。女子高校生は松葉杖の経験があり、一度手本を見せてくれた。「左右の杖を同時に出して、次は……。」と分かりやすく丁寧に説明してくれ、私も女性も笑顔になった。

自分だけでなく、助けを手伝ってくれる人が増えたことでとても安心した。声を掛けたまでは良かったが、女性が途中でつまずいて倒れてしまったら、などと考えて不安だった。緊張の糸が少しほぐれた私は、２人といっしょにたわいもない話をしながら歩いた。

「私ね、和さんと呼ばれているの。」

ふだんは、折り紙の習い事や色々な集まりに参加し、自分よりも年上の人の話し相手になってあげている毎日を過ごしているようだった。和さんは、人のために喜んで尽くせる優しい人柄だ。だからこそ、こうして自分が困ったときに、助けが自然と集まるのだと納得した。

そして、家の近くにまで辿り着く頃に近所のお兄さんと出会い、和さんを家まで送ってくれることになった。

私から高校生へバトンが渡り、アンカーは近所のお兄さんへ繋がった。私は、嬉しく温かい気持ちになった。１人ではなく大勢が集まれば大きな親切となり、できる幅も広がり笑顔も広がる。自分は、友達から優しいと言われることが多いけれど、それはもともと持ち合わせた性格ではなく、いろいろな人と関わりを持ち、新しい経験をしていくことで自然と周りの世界が見られるようになったのだと思う。

自分のことでいっぱいになり、周りに気を配れない日もあるが、親切のバトンを繋ぐことができた嬉しさと、和さんの「ありがとう」の言葉を忘れずに、みんなが笑顔で過ごせるような社会づくりに、私も積極的に参加していきたいと感じた。